

2018  
おもろ  
チャレンジ

## バイオリン工房からモノづくりを学ぶ

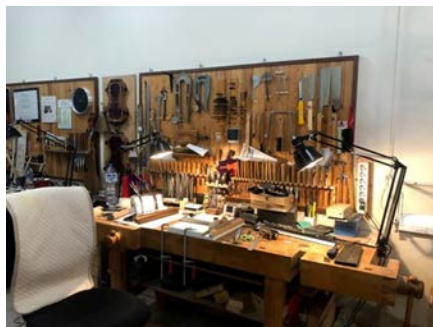
工学部 1年

山内 景介

イタリア、フランス、ドイツ

2019年2月8日-

2019年2月28日



### 渡航概要と内容

イタリア、フランス、ドイツに滞在し、バイオリン製作の町として有名な都市にある楽器博物館や弦楽器製作工房を見学し、英語や筆談でのインタビュー活動を行い、弦楽器製作の過程や各国の弦楽器製作の違いを学びながら、これからのモノづくりに活かせるものを考えるというのが、今回の渡航の目的であった。

1週目は、イタリアのクレモナにある、バイオリン博物館、私立と公立の二つの弦楽器製作学校、4つのバイオリン工房を訪れた。クレモナは、映画「耳をすませば」での会話でも取り上げられたように、バイオリン製作の町としては、最も有名である。工房数も100軒以上あり、渡航中に訪れた都市の中では、最も製作が盛んに行われている。

2週目は、フランスのパリとミルクールに行き、パリでは楽器博物館とローム通りにある5つの工房、ミルクールでは弦楽器博物館と4つの工房を訪れた。パリのローム通りでは、弦楽器だけではなく、様々な楽器や楽譜などが販売されており、楽器製作工房もいくつかある。ミルクールは、かつてヴェネチアとアムステルダムを結ぶ物流の中継地点として栄え、レース作りや弦楽器製作などの工業が盛んに行われていたが、第二次世界大戦後から徐々にその勢いも衰え始め、今では、大量生産するための弦楽器工場はなくなり、弦楽器工房の数も12軒と、かなり減少していたが、国立弦楽器製作学校があるなど、弦楽器作りの町として300年以上も続いてきた歴史ある町である。

3週目は、ドイツに行き、ミッテンヴァルトでは弦楽器博物館と2軒の工房、ブーベンロイトでは弦楽器博物館、ミュンヘンでは1軒の工房を訪れた。ミッテンヴァルトもフランスミルクールと同じようにヴェネチアとニュルンベルクを結ぶ中継地点として、1600年後半から栄えた。今では工房数も10軒と減少したが、世界的な弦楽器の製作コンクールが開かれたり、楽器製作学校があったりと、バイオリンの町としては有名である。また、戦後、バイオリン製作技術

を持ったチェコスロバキア移民が移住してきたことで、弦楽器の大量生産が始まったブーベンロイトでは、今はバイオリンやギターの量産工場は潰れ、約10軒の工房があり、工場では、主にバイオリンに使われるコマやペグといった消耗品を生産している。またミュンヘンは元々、有名な音大やオーケストラがあり、音楽家の街として栄えており、楽器屋の数は多かったが、ここ40年で楽器工房の数も増えてきている。

### 文化の違いで困ったこと

- ・日曜日や夜間は空いている店がとても少ない。

日曜日には観光することはできるが、飲食店や工房なども早めに店を閉めたり、休みであったりすることが日本より多いので、店を探すのに苦労した。

- ・レストランの水が有料である。

日本ではほとんどの飲食店の水で無料であるが、海外では水は注文しなければ出てこない。しかも、そこそこ高かった。

### 渡航中のトラブル

- ・金銭の要求をされた。

ミラノの観光地で、しつこくセネガル人に絡まれて、「free」と言いながら、自分の腕をつかみ、ミサンガをつけてきた。その瞬間逃げようと思ったが、リーダーと呼ばれる男が来て、囲まれて金銭を要求された。紙幣を要求されたが、紙幣は持ってないと伝え、持っていた硬貨を渡し、急いで逃げた。観光地で知らない人に声をかけられても、応じず、すぐ逃げるのが大切であると実感した。

- ・工事中によりパリの地下鉄が使えなかった。

パリ最終日にナンシー行の電車に乗るために、ホテルの近くの地下鉄を利用し、駅に向かおうとしたが、工事中のため使えず、予約していた電車の時間に間に合わないと思い、焦っていたが、近くにいた若者がバスでも行けることを教えてくれえたおかげで、電車の出発時刻までに駅に着くことができた。困ったときは、周りの人を頼ることも必要である。

- ・国境をまたぐとWi-Fiを使用するのに時間がかかる。

飛行機で現地に着いた後や、移動により国境をまたいだりした後は、Wi-Fiがなかなか作動しないので、空港から市内に降りた後や、ネット環境の整っていない町に着いた後は、Wi-Fiを使うことができず、ホテル到着までに時間がかかった。その際は、近くにいる方々に目的地までの行き方を聞いたり、目的地が同じときは一緒に行動したりして、助けてもらった。ヨーロッパ観光においては、空港でWi-Fiを借りるよりもSIMカードを借りる方が、低価格で、スムーズにネット環境にアクセスできるので、SIMカードを借りる方が良い。

- ・ミルクールで最終バスに置いて行かれた。

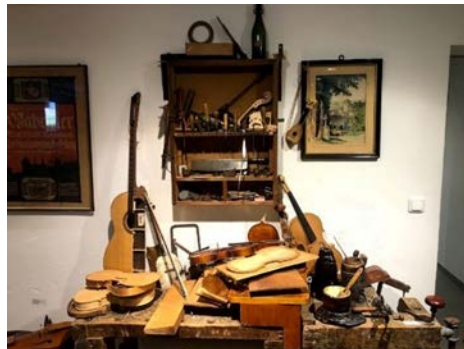
ミルクールでは、仲良くなった職人さんのお宅で夕食をふるまってもらい、夜9時7分発のバスに乗って、隣町のホテルまで帰ろうとしていたが、夜9時にバス停に行き、30分ほど待っていてもバスは来なかった。お見送りに来て下さった職人さんに会社に問い合わせてもらおうと、自分が着く3分前に出発していたことがわかった。途方に暮れそうだったが、その職人さんが自分のあるホテルまで車で送って行ってくれたため、ホテルに着くことができた。バスは時々、予定時刻よりも早く出発してしまうことがあるので、注意が必要である。

・カード払いできない店も意外とある

ヨーロッパはキャッシュレスが進んでいると聞いていたため、現金はほとんど持って行かなかったが、田舎に行くほど、カードが使えなかった。ミッテンヴァルトのホテルでは、現金で払うことになり、所持金が3ユーロとなってしまった。さらに、自分のクレジットカードではATMで現金を下ろすことができなかつたため、近くの銀行で日本円1万円を両替して、なんとか生活することができた。田舎はもちろん都会であっても、どこでもカードが使えるわけではないので、現金はある程度、持っていく方が良い。



ミルクール弦楽器博物館



ブーベンロイト弦楽器博物館



ストラディバリのバイオリン

## 渡航を通じて感じたこと・学んだこと

渡航を通して学んだことは、主に3つある。

1つ目は自分が当初予想していたほど、国によるバイオリン製作の違いはあまりなかったことが挙げられる。渡航前は、本で見たり、日本人の職人に聞いたりして、イタリアでは伝統的な一本作りが盛んで、フランス・ドイツでは分業による大量生産によって、商業用にバイオリンが作られているということ予想して現地に行ってみたが、現存しているヨーロッパの工房では、ほぼすべて職人一人による一本作りが行われていた。自分が訪れた工房の中には、分業体制でコントラバスを作成している工房があったが、分業をする際は、分業用に生み出された外枠を使用して楽器を製作することもあるということも学んだ。また、ニスづくりの観点からみると、イタリアのクレモナでは、薬局で売られている、さまざまな虫の分泌液の結晶を溶かして、自分でニス

を作っていくことが当たり前であるのに対し、ドイツでは市販されているニスをそのまま使用することが多いという違いがあった。さらに、ドイツのミッテンヴァルトの製作学校では伝統に倣って、設計図通り、忠実にバイオリンを製作することを良いとしているが、それ以外の地域では設計図を書いても、それ通りにつくらず、その時その時の木の密度や木の年齢に応じて、木との対話でつくることが良いとしていた。しかし、どちらの製法でも素晴らしい音色を奏でられる楽器ができるというのは、とても面白いことだと感じた。また、最近のバイオリンの工業的大量生産地帯は、他の工業と同じように中国に移っているため、ヨーロッパでは、大量生産するための工場がほとんどなくなってきており、職人による一本作りを行っていることが多いということが分かった。さらに、その職人は、他の国の工房や学校で学んだあとに、自分の国やさらに他の国で工房を開いたりするため、国ごとの違いというよりは、個人個人による違いの方が目立つのではないかと感じた。

2つ目はバイオリン製作で有名な街の歴史である。イタリアのクレモナはバイオリン発祥の地ということで、バイオリン作りが今でも盛んに行われているが、フランスのミルクールやドイツのミッテンヴァルトは大都市間の貿易の中継地点として、バイオリン以外の楽器や軽工業も盛んに行われて、栄えるようになり、戦後、航空機の発達や後継者不足から、その勢いを失ったという共通点があることは、とても興味深かった。さらにドイツのブーベンロイトでは、戦後、弦楽器製作の技術を持ったチェコスロバキア移民が移住したことで、楽器製作が盛んに行われるようになった。このように、一概にバイオリン作りで有名な都市といっても、その都市がどのようにして、バイオリン製作が盛んに行われるようになったかは異なるという事実は、調査していて非常に興味深かった。これから、ますますグローバル化が進むことで、日本も例外でなく、世界中でますます移民が増えるであろう。移民が増えることで、デメリットが取り上げられることの方が多くに思われるが、この例のように、移民なしでは成立しない街というのは、ますます増えていくであろうし、そうしたときに、その街に全く新しい歴史が刻まれていくというのは、その街にとっても、メリットの方が多いのではないかと感じた。

3つ目はバイオリン職人のバイオリン製作・修理にする向き合い方である。現地では、バイオリン製作の具体的な過程以外にも、バイオリンを作る上で大切にしている心構えや、これからの目標などもお聞きすることができた。その中で、現地でバイオリンを製作している2人の日本人の方にもお話をお聞きする機会があり、さらに細かい製作過程や、彼らは何故バイオリン製作者としてイタリアで生きていくか決めたのかについてのお話など、貴重なお話もお聞きすることができた。そのお話の中で「自分の作ったバイオリンには、それまで生きてきた自分の生き様が反映されて、それが何百年も残り続けるから、それが製作者として嬉しいことである反面、怖いことでもある」と製作者の方がおっしゃっていたことが自分の中では、一番心に響いた。バイオリンは何百年も残り続ける楽器なだけに、製作者の方はそのことも考えて、日々の生活態度や、製作に対する姿勢にも気をつけながら製作しているということを初めて知った。そのときの自分の調子が好調で、健康な生活ができたり、充実した生活が送れていたりすることも楽器には表れるし、逆に自分が天狗になっていたり、生活が乱れていたりしていると、それも楽器には表れていて、その時の自分は気付かなくても、5年後10年後になって、自分がその楽器を見返したときに、その時の自分の状態に気がつくということがよく起こるとおっしゃっていた。このことは、

バイオリンのように形には残らないにしろ、あらゆる分野の勉強やあらゆる職業についても、同じことが言えるのではないかと感じた。



裏板原料のメイプル



横板とネックと設計図



ミッテンヴァルドでの製作風景



市販ニス



ニスの原料

## ■ 今回の経験をどのように今後生かしていくか

僕は将来どういう職につくのかわからないが、今は、モノづくりを通して、後世に良い影響をもたらすような仕事をしていきたいと考えている。自分がどのような職に就こうが、彼らバイオリン製作者のような姿勢で、ものごとに打ち込み続けることができれば、きっと自分が死んだ後も、大なり小なり後世に良い影響を与え続ける何かが残せるのではないかと漠然と思った。だからこそ、自分はそういう姿勢でこれからものごとに向き合っていきたい。

また、今回初めてのヨーロッパに一人で渡航し、分からないこともたくさんあったが、旅先で

出会う様々な人たちの助けにより、無事に渡航を終えることができた。もちろんこの度で僕に関わってくれたほとんどの人は、僕と初対面であったが、自分に対して、とても誠実に接してくれた。だからこそ、自分も初対面であろうとなかろうと、自分に関わってくれている人たちに対して、これからもっと誠実な姿勢で向き合いたいと改めて思った。さらにこの一人渡航により、海外で旅することに対する自分のハードルが下がったので、大学生のうちにもっと広い世界を見続けていきたいと思うと同時に、自分の周りの友達にもこの体験を共有して、海外をもっと身近なものに感じてもらい、海外に興味をもつ友達が増えるようにし、自分の見聞だけじゃなく、周りの見聞によっても自分の世界を広げていきたい。

## 今後本プログラムを希望する学生へのアドバイス

このプログラムに少しでも興味があり、海外に出てみたいと思ったら、迷うことなく応募して欲しい。このおもしろチャレンジほど、自由度がきいて、自分のしたいように旅の工程を決められる奨学金制度はどこを探してもそうない。僕はノリと勢いで応募し、この制度を利用できるようになり、具体的な準備をしていくのは面倒に感じることも少々あったが、いざ現地に行ってみると、渡航前には想像もしないような刺激的な毎日を送ることができた。お金のない大学生にとって、これほどまでに金銭的援助をしてくれるプログラムはそう存在しない。だからこそ、このプログラムをもっと多くの人に利用して欲しいと思う。思い立ったが吉日、自分が少しでも興味のあることをさらに突き詰めるためにも、このプログラムを使って、未知の世界に飛び込んで行って欲しい。

## 主な奨学金の使途

\*渡航費

\*宿泊費

\*食費

\*現地交通費

\*海外旅行保険、博物館入場料、通信費 など



クレモナヴァイオリン  
製作専門学校



クレモナ大聖堂



ネックと原料